

## 促成イチゴのポット育苗における育苗培土と施肥

農業研究センター 農産園芸研究所 野菜部八代研究室

### 研究のねらい

県内のイチゴ農家では、育苗用培土は主に透排水の良い赤土を利用しているが、良質の赤土が入手しにくく、代替物の利用を検討する必要がある。

そこで“とよのか”を対象に赤土の配合量を減らし、今までのポット培土に比べ育苗に適する床土を、直径12 cm及び10.5 cmポットにおける混合有機物、炭化物及び施肥について検討した。

### 研究の成果

普通ポット栽培では12 cmポットを使用し、炭化物を多量には混合しない方が多収となる。炭化物の種類では、クンタン粉ガラとブラックワンでは、大差なかった。

12 cmポット培土の混合割合は、育苗時の天候にも左右されるが、赤土40～60%、粉碎粉ガラ30～50%、炭化物10%が適している。クラウン径は、10～11 mm程度となった。普通ポットについては、最終追肥を8月15日とし、その施肥量は、株当たり窒素成分で24 mgとし、液肥で与える(通常の液肥で500倍1株100 cc灌注)。

夏期低温処理育苗(短期株冷や夜冷短日処理)を行う場合は、冷蔵庫の利用効率と処理効果から10.5 cmポットが有利であり、その場合の混合割合は、粉碎粉ガラ40～50%、ピートモス30%、炭化物20～30%とし、赤土を混合する必要はない。クラウン径は、9～10 mm程度となった。

粉碎粉ガラについては、粉碎するサイズで、腐食の進み方が異なり、イチゴの育苗ポットに利用する場合、細かく砕かず、荒く砕いたものを使う。

粉碎粉ガラを用いると初期生育がやや遅くなるため、置き肥等の施肥をやや多くする必要がある。また、ポットが軽くなるので、風対策が必要である。

炭化物を混合すると、花芽分化期の窒素切れが悪いので、遅くまで固形の置き肥を与えない。

第1表 普通ポットにおける年内月別商品果収量1993年1区20株(1部省略)

試験区		11月		12月		年内収量		1果重
		個数	重量	個数	重量	個数	重量	
ポット サイズ	12cm	4.9	90.5	117.6	1609.0	122.5	1699.5	13.9
	10.5cm	0.4	5.1	83.6	1186.0	84.0	1191.1	14.1
炭化物 混入 割合	20%	1.3	22.3	99.1	1402.8	100.4	1425.0	14.2
	10%	4.0	73.4	102.1	1392.3	106.1	1465.6	13.7
Scheffe	5%	2.2	41.7	8.5	99.7	9.4	123.1	N.S
	10%	3.5	65.4	13.3	156.3	14.7	193.0	

第2表 年内商品果収穫重量交互作用  
普通ポット1992年(有意差5%レベル)

液肥の施用濃度 (株当たり窒素量)	24mg	12mg	
炭化物の 混入割合	30%	2575g	2580g
	10%	2655g	2464g

第3表 年内商品果収穫重量g交互作用  
普通ポット1993年(有意差5%レベル)

炭化物の混入割合	20%	10%	
ポットの サイズ	12cm	1603.0	1796.0
	10.5cm	1247.0	1135.3

第4表 10.5cmポットにおける床土の影響 年内商品果 1993年

試験区	個数(個)	重量(g)	1果重(g)
炭化物10%ピート無し置き肥ジャンプ	81	1143	14.1
炭化物10%ピート無し置き肥ビッグワン	77	1025	13.3
炭化物20%ピート30%置き肥ジャンプ	80	1205	15.1
炭化物20%ピート30%置き肥ビッグワン	94	1376	14.6